岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要　第3号　(1993) pp. 165－174

英語の文構造にみる重層性

中村　順良*　　橋本　二郎*

(1992年12月8日受理)

[著者名]　Yukiyoshi NAKAMURA and Jiro HASHIMOTO

[表題の欧文訳]

Levels of Description of the Sentence and
Teaching English to College Students

[キーワード] 英語教育，大学生のための治療的教育課程，文構造，記述のレベル

1.　はじめに

日本語を母国語とし，毎日を日本語のなかで暮らしているわれわれがみな日本語に精通し，日本語をいつでも達意に使いこなしているかといえば，そうとばかりはいえないであろう．母国語ですらそうである．外国語である英語を思うように使えるようになかなかならないのは，むしろ，当然といえるかもしれない．

しかし，英語を学ぶ究極の目標を，達意の英語使用者になること以外のところに求めることはむずかしい．達成することのきわめて困難な目標であることを承知したうえで，なおかつ，めざさざるえないという意味では，高すぎる目標であるともいえよう．頂上に到達するまでに英語の学習者がのりこえなければならない課題は多い．一つをのりこえれば，必ず次の課題が待ちかまえていると言ってもいいすぎにはならないであろう．

大学生の場合も，この点では同様であって，彼らもまた少なからざる学習課題を抱えている．それらの課題は，見たところ，二つのグループに大別されるようである．大学生になるまでに解決してくるべきであったのに実際には解決されずに大学にまでもちこされてきてしまったと思われる課題群が第一のグループをなす．残りは，それら初級，中級レベルの課題をこえたときに新たにたち現れてくる課題から成るグループであり，いわば，大学生レベルの学習者にもっともふさわしい課題群である．

辞書を使いこなしたり，英文の朗唱や朗読を聞いたり，英文を音読したり，英文を暗唱したりすることや，英文法の知識を獲得したりすることは，初級，中級レベルの英語学習者がとり組むべき重要かつ中心的な課題であるにもかかわらず，センター試験で直接問われることのないことがらであるという現実的な理由からであろうか，中学校や高等学校の英語教室では，軽視されたり，極端な場合には，まったく無視されたりしているという実

*岩手大学教育学部英語科

態があるという．これらの経験や知識が欠けたり，不足したりしている学生の場合，過去の借金の返済に汲々とする身でありながら，英語の教室では，新たな上級レベルの課題に挑戦して成功することを強く求められるのである．

そういう学生を少なからず抱えている本学部の英語の教室では，英語科所属学生を主対象とする場合であっても，課題が学生に課される場合は，なんらかの意味での「治療的」な配慮で相当ていど調理されたうえで与えられる必要があるといえよう．しかし，留意しなければならないこととして，「治療」に専念するあまり，課題の質や程度をそれによって必要以上に低下させるべきではないということがある．大学生レベルの課題に挑戦し，勉強することが，同時に，それ以下のレベルで取りこぼしてきた経験や知識の補充と回復を促すのに有効となるような課題設定が理想であろう．

そうした必要に迫られて，われわれは，相当ていどに包括的で，かつ，あるていど高次の課題であって，それにもかかわらず，学生に挑戦をためらわせるほどの難題ではなく，そのうえ，事後に適度の成功感，達成感を残すことのできるような，そういう課題を真剣に模索し始めてから数年が経過した．本論考は，そうした模索の旅をふりかえりながら書かれるいくつかの論考の最初のものになるはずである．

2．　コンテクスト，テクスト，そして，「文」

2．1．　ことばが使用されるのは，コンテクスト（context）の具体的な要請がある場合である．その場合，ことばは，その場その場のコンテクストの要請に応えられうる形，すなわち，テクスト（text）の形で用いられる．その意味で，コンテクスト抜きのテクストは存在しえないものであるということができる．

テクストは，音声媒体（spoken mode）か，文字媒体（written mode）かのいずれかの媒体により発信者から受信者へと伝達される．したがって，テクストは，原理的に，音声テクストであるか，文字テクストであるかのいずれかである．（指や顔の表情などはわれわれの生活に欠かすことのできない重要な情報伝達手段ではあるが，たとえどのように有用であっても，本来の意味でのことばテクストを運ぶ媒体とは異質のものである．）

上述したように，コンテクスト抜きのテクストは存在しえないものであるとするならば，文字テクストはコンテクストに拘束されない（context-free）とするOlson（1977）らの説に妥当性のないことはすでに明かであろう．

テクストは，音声もしくは文字のランダムな集合ではない．テクストには，テクスト構成を管理する構成原理がある．それは，ちょうど，文には文構造を管理する構造原理があるのに平行的な現象であるということができる．しかし，留意しなければならないのは，テクスト構成原理は文の構造原理の単なる延長ではなく，その間には質的なギャップがあるということである．換言するならば，統語論の守備範囲は文を最大単位とし，文境界を越えることはない．他方，談話分析や語用論などでは，記述の対象となっているテクストがコンテクストの要請に応えられるような特質をもたなければならないことから，その構成原理も，統語論の構造原理とは異なり，構造的ではなく意味的な性格を帯びることになる．

2．2．　よく知られているように，「文」（sentence）の定義は，幾多の先人の挑戦にもかかわらず，いまだに満足のいくものが得られたとはいえない現状にある．このような現状の中で，あえて「文」の定義に挑戦しようという意図は本論考の著者にはないが，本論考が「文」の構造を問題にしようとしているからには，そこで記述の単位とされる「文」の定義の問題に，多少，触れておく必要があるであろう．

問題を，英語に限定して，かつ，媒体（mode）を文字テクストに限定するならば，「文」を定義することはそれほど困難なこととは思われない．なぜならば，標準的な文字テクストにおいては，「大文字で始まり，かつ，次の三つの句読点／．？！／の一つで終わるテクスト部分」が「文」と認識されるからである．　標準的な書き手は，「文」の産出を意図するとき，上の定義に従って書き，標準的な読み手は，上の定義に従って「文」を識別して読みとる．

「文」についての上の定義の当てはまる範囲は，このように，英語では，標準的な書き手による，標準的な文字テクストに限られる．英語のテクストであっても，この定義の当てはまらないテクストは広く存在する．英語の標準的でない文字テクストはその一例である．（英作文で問題とされる，capitalization errors，comma faults，fused clauses，fragmentary sentences，punctuation errors　などを含む文字テクストは，なにも，作文の教室で散見される未熟なテクストだけに限られるというものではない．）しかし，もっとも重要なのは，上の「文」の定義は，文字種類と句読記号に依存しているかぎりにおいて，一切の音声テクストに無効であるということである．

これは，音声媒体に一次的な位置づけを与えるという明確な主張をもっている現代言語学の立場から見るならば，重大な欠陥であるといえる．「文」の定義といえども音韻論的な根拠づけを欠くことはできないはずだからである．したがって，標準的な文字テクストに基づく上記の「文」の定義の有効性には，一定の限界のあることを認めなければならない．と同時に，このような一定の制限内であれば，「文」の定義は可能であることをも認めるべきであろう．

ということであるなら，文字媒体に基づいて定義される「文」のもつ文法・意味論的な特性に近い特性をもつ文法範疇が音声テクストにも存在すると想定して，それを，厳密な定義はひとまずおくとして，改めて「文」と呼び，その意味での「文」を文法記述の単位とする立場をとることはできないであろうか．われわれは，Halliday(1985) とともに，それは可能であるし，それが，現在，われわれのとりうる最善の現実的な選択であると考える．これにより，文法記述において従来便利に用いてきた「文」という記述の単位を放棄することなく，文に基づいて文法構造を記述してゆくことが引き続き可能になる．

3．　言語記述のレベル

3．1．　現代言語学は，記述のレベルという装置をもっているが，これは，言語の分析・記述を簡潔にかつ効率的に行うためには欠くことのできないものである．どのようなレベル設定をするかは個々の言語理論の問題であり，したがって，原理的には，理論が異なれば設定されるレベルも当然異なる．実際にはどうかといえば，理論間の相違は確かにあるものの，共通点も多く，いわば，理論間の翻訳が可能な場合も少なくないと思われる．

言語という同一現象を分析対象としている以上，それぞれの理論の主張するレベルに近似性が見られるとしても，それほど不思議はないともいえるかもしれない．

統語論のレベルでの文の分析・記述を，語用論のレベルの談話のそれと混同しないことは，現在では，どの言語理論でも当然視されていることであると思われる．そして，両レベルの区別が，記述の範囲が文境界を越えるか越えないかに決定的に依存していることには先に触れるところがあった．焦点を文構造におく本論考が文境界を越えることはないのは改めていうまでもないであろう．文を越えるテクストの構成や，テクストとコンテクストとの関係等についての詳細は稿を改めなければならない．

3．2．　文レベルの構造記述をめざす記述のレベルを，文文法のレベルということがある．このレベルは，さらに，複数の下位レベルから成る複合体である．それら下位レベルは互いに他と重なりあって，全体が，文文法という記述のレベルを構成している．観点を変えれば，これらの下位レベルの記述を重層的に積み重ねて一体化したうえで得られる複合的な記述を，文の構造記述であるといっていると見ることができる．

本論考が取り扱う下位レベルは，統語論，意味役割，情報，主題，音韻論の各レベルである．そして，文の構造記述は，それぞれの観点からの記述を複合してえられるものであると考える．なお，関連して，語彙項目のもつ情報にも触れるつもりである．

4．　統語論レベルの構造

統語論が分析の対象とするものは，いわゆる，学校文法がその解剖（parsing）の対象としているものとほぼ重なると考えてよいように思われる．すなわち，文はいかなる構成要素に分解されるか，また，それらの構成要素が互いにどのように関係づけられて文という最大構成要素を構成するに至るかを，原理づけられた方法で説明すること，これが統語論の目的である．どういう説明原理に立つかは，むろん，個々の言語理論の問題であるから，分析の対象を同じくしながら，分析結果を異にすることがあってもいっこうに不思議はない．

例えば，Jack fell down.　という英語の文には，学校文法では，通例，構成要素が文に対してどのような機能を果たしているかに基づいた(1)のような分析が与えられる．

(1) Jack　　fell　down.
　SUBJECT　|　PREDICATE

Halliday（1985）の機能文法がこの文に与える文法分析のうちでこれにもっとも近いと思われるものは，(2)に示される構造であろう．

(2) Jack　　f e l l　　down.
　SUBJECT　FINITE | PREDICATOR　ADJUNCT

また，チョムスキーの変形生成文法のいわゆる標準理論に従うとするならば，次の(3)のような分析を与えることができるであろう．

(3) Jack fell down.
NP | VP

標準理論よりあとの拡大標準理論の最新版なら，もっと抽象度の高い深い分析を与えるかもしれないが，それらの詳細にふれるのは本論考の目的ではない．ここでは，文構造の記述が統語構造を記述するレベルを含むということを述べるにとどまる．

5. 意味役割レベルの構造

「意味」という語のもつ意味範囲は広く，それにともなうように，意味論といわれる言語の研究分野は，一般的にということであるなら，多種多様な意味現象を分析・記述の対象に含みうるものであるが，意味の一つである意味役割（関与者役割，または，主題役割，θ役割などともいわれる）の記述は，文という統語範疇を記述の対象とするという意味で，文文法のレベルの記述であると考えられる．

Jack fell down. の意味役割解釈は，次の(4)または(5)に示す記述を許すと考えられ，この点で，この文は曖昧であるといえる．

(4) Jack fell down.
PATIENT |
(5). Jack fell down.
AGENT |

このような解釈の可能性が生ずる根拠の一つは，いうまでもなく，fall という登録語彙項目が PATIENT（被動者）とも AGENT（動作主）とも共起しうるという，語彙目録（日常生活の中では，辞書）記載の情報である．

6. 情報構造

「情報」という語もまたきわめて多義であるが，ここでは，きわめて限定された意味で用いる．すなわち，文の文法記述のレベルに，情報構造の記述が含まれると考え，そのかぎりでの情報を問題としてゆくものである．

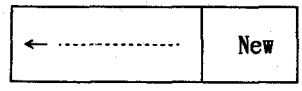
このかぎりでは，情報は，New（新）であるか，Given（所与）であるかのいずれかである．そして，われわれの例文 Jack fell down. の情報構造は，無標(unmarked)の場合，(6)の(a)，(b)，(c)のうちのいずれかである．

(6) Jack fell down.
(a) Given | New
(b) Given | ← ····· New
(c) ← ····· New

すなわち，この文の情報の中心はイントネーションの中心である down に置かれ，これを中心とするある一定の範囲がこの文の新情報部分である．新情報をどの範囲まで及ぼすか，どの範囲にとどめるかには選択が許されており，極端な場合，（例外的にという含みはまったくないのであるが，）文全域が新情報であるような文，すなわち，所与情報をまったくもたない文もありうる．反対に，所与情報のみからなる文，すなわち，新情報をまったくもたない文は使用不能であることはいうまでもない．上の無標の例では，新情報は，それぞれ，(a)downのみ，(b)fell down，(c)Jack fell down（文全域が新情報）である．

一般に，情報の中心はイントネーションの中心に一致する．無標の場合，新情報は，無標のイントネーションの中心を情報の中心として，次の(7)に示す範囲にまで選択的に拡大可能であることが知られている．

(7)



ということであれば，有標の情報構造はこの型に従わないであろうとの予測はすぐに立つ．そして，それが有標のイントネーションに依存するであろうことも．すると，次の問題は，有標のイントネーションと情報構造との相互依存関係はどんなものなのかということになるが，それについては，音韻論レベルの構造を述べることにしている§9で少しく触れるところがある．

7．　主題構造のレベル

主題（theme）は，メッセージの提示の仕方に関わる概念であるから，談話の各レベル（例えば，音声テクストに含まれる問と答とから成る隣接対（adjacency pair）や文字テクストにおける段落など）に存在する．文レベルにおいては，文頭の要素が主題を担い，残余の要素が主題に対する題述（rheme）を担うという形で，主題構造が実現される．

(8)　Jack　　fell down.
　　THEME　| RHEME

8．　法　構　造

法（mood）は，ことばの担う対人関係機能に対応する部分であり，代名詞の選択，法助動詞の選択，法副詞の選択などをとおしても実現されるが，文にもこれに対応する構造が見られる．われわれの Jack fell down. の法構造を(9)に示す．

(9) Jack　　f e l l　　down.
　SUBJECT FINITE | PREDICATOR ADJUNCT
　　MOOD　　| RESIDUE

文構造の分析に法構造表示レベルが必要な理由，ならびに，このレベルが対人関係機能に対応するとされる根拠について簡単に述べておくべきであろう．

Jack fell down. に対応する yes/no 疑問文は⑽であるが，

⑽ Did Jack fall down?
MOOD | RESIDUE

fall の過去形を／FINITE+fall／（もしくは，／TENSE+fall／でもよい）と分析する通例に従うならば，語順や形態の変更は法に対応する部分の中で生じ，そのほかの「その他部分」（RESIDUE）は疑問文形成には関係してこないところであることが見てとられるであろう．

また，⑽の疑問文に対する応答形の一つ⑾は，同様の観点からみるなら，法に対応しないその他部分を切り捨てることによって形成されていることは明白である．

⑾ Yes, he did.／No, he didn't.

以上，文を法部分と，その他部分とに分かつ根拠を簡単に見たのであるが，以上はこのままで，法構造というものがことばの対人関係機能に対応する構造であることの説明にもなっている．相手がいないところで疑問文を用いて質問したり，相手から質問を受けることなしに応答文を用いて応答したりすることは，普通の人なら，普通の場面では，しないことだからである．

9． 音韻論レベルの構造

音韻論は，個々の音単位と，それらの結合関係のみならず，それらの音結合からなる諸形態（すなわち，形態素，形態素結合，語，句，節，文）の分節的および超分節的な音韻現象をも扱う．本論考が注目しようとしているのは，文の超分節的な音韻現象，とりわけ，イントネーションの中心をどこに置くかに関する選択の問題である．

無標の場合，文のイントネーションの中心が置かれるところは，文強勢（この語は，本論考では，語強勢に対するものとして用いる）を担う要素の中で文尾にもっとも近い位置を占める要素である．Jack fell down. の無標の場合のイントネーションの中心は，下の⑿に大文字で示す要素によって担われる．

⑿ Jack fell ↓DOWN.

イントネーションの中心は，音声学的には，他の部分にくらべて，相対的に著しい声調の下降（もしくは，上昇）によって実現される．上の例では声調は下降することを／↓／で示してある．

このイントネーションの中心が，情報構造における情報の中心に重なることについては，すでに，上の§6で触れた．

イントネーションの中心を文中のどこに置くかには選択がある．fell に置く場合を(13)の(a)に，Jackに置く場合を(b)に示す．

(13) (a) Jack ↓FELL down.
(b) ↓JACK fell down.

情報の中心が、(a)では fell に，(b)では Jack に置かれることは改めていうまでもあるまい．これらの場合も，そこが新情報（の中心）となり，他は所与の情報となるのは無標の場合と変わらない．

10. 語彙項目のもつ情報

語彙項目は，それぞれに固有の統語情報，意味情報，音韻情報をもっている．文に統語論的に適格な構造を保証するためには，語彙項目に記載されている統語情報が不可欠である．われわれが使ってきた文 Jack fell down.を例にとるなら，fellが PREDICATOR の位置を占めて適格な文をつくり出しているが，これが適格であることの保証には，fall という語彙項目のもつ統語構造に関する情報，すなわち，／verb／という語彙範疇表示が不可欠である．同様に，意味役割や音韻に関する語彙項目に固有の情報なしには，文は意味論的，音韻論的適格性を保持することはできない．

その意味で，語彙項目記載情報の実質的，形式的研究は重要である．

語彙項目のもつ各種の情報は，言語学的には，語彙目録に登録される語彙項目エントリーに，項目ごとにまとめて記載されるものと仮定されている．

日常生活や英語の勉強の場で学生が実際に利用することができるのは，学問的に仮定されている語彙目録ではなく，いわゆる辞書であるが，以上述べてきたことから，文を統語論的，意味論的，音韻論的に十分に理解するためには辞書は欠くことのできないものであることが理解されよう．

11. むすび

以上，文構造の分析レベルを列挙し，各々を略述してきた．各レベルの分析結果を重ね合わせると，文構造の全体像が得られる．これが，われわれの出発点であり，到達点である．

ただし，ここで，レベル間の相互関係について触れておかなければならない．

すでに触れるところがあったように，情報構造は統語構造と音韻構造とに依存する．また，主題構造と法構造とは，統語構造に依存している．結局，情報，主題，法の各構造は，文内にあって文を構成する要素についての情報というよりは，むしろ，文の統語・音韻構造に依存しながら，文に平行的に存在する，文についての情報であるということができる．

これらとは異なり，統語論，意味役割，音韻論の各レベルは，文そのものを構成する文内要素を分析対象とするものである．そして，語彙情報は，文の，統語論的，意味論的，音韻論的分析に不可欠な情報として提供されるものである．

こういったレベル間の関係にも留意しながら，本論考で調べた統語論，意味役割，音韻論，情報，主題，法の各レベルの分析結果を重ねてみようと思う．例文は，Jack fell down. とし，その下に，上で得られた分析結果を重ねて表示する．最初に，無標の場合，すなわち，特別な選択をまったくしなかった，いわば，もっとも普通の場合を示す．

```
(14)    Jack        f e l l        ↓DOWN.
        SUBJECT FINITE | PREDICATOR  ADJUNCT
        MOOD           |  RESIDUE
        THEME |      RHEME
        AGENT |
        Given        ←------------- | New
```

次に，有標の一つの場合として，Jack をイントネーションの中心とし，したがって，そこを情報の中心にするという選択がなされた場合の構造を示してみよう．

```
(15)  ↓JACK      f e l l        down.
      SUBJECT   FINITE | PREDICATOR ADJUNCT
      MOOD             |  RESIDUE
      THEME    |      RHEME
      AGENT    |
      New      |            Given
```

そのほかにも，いろいろな選択の可能性がある．そのすべてに触れることは不可能であったが，Jackの意味役割は，この文の場合，AGENT に限られるものではなく，選択肢の中には PATIENTも入っているということには触れるところがあった．

ことばを学ぶということは，そういった選択の可能性のネットワークを手にいれることを必須のこととして含むものであろう．それなくしては，選択はできない．つまりは，文をつくることができない，文構造を把握することができない，したがって，意味を伝えることも意味を解釈することもできないということになるのではないだろうか．そういう選択の可能性のネットワークの体系を，Halliday (1985) に従って，文法と呼ぶとするなら，文法を学ばずして，外国語を学ぶことはできないことことは明白である．

そして，文法の主要な情報は語彙項目が分けもっているという上述の考察が正しいものであるなら，外国語として英語を学ぶ学生には，辞書をしっかりと使いこなしてもらう必要があるであろう．

さらに，情報構造が統語構造と音韻構造とに依存するということであるなら，英語の標準的な朗唱や音読に耳を慣らすことや，それを手本として，英語の文章を朗読することなどは，学生にとって必要欠くべからざる訓練であることになるであろう．

以上述べてきたような基本的な訓練や基本的な知識を欠いたまま大学にきてしまった学生にどう対応すればよいのかを考え，模索する中から本論考のアイデアは生まれた．確か

に，主に治療を目的とする治療的教育課程を編成して，ある特定の学生には必修単位として課すことも考えられうる可能な対応の一つであろう．しかし，治療的教育課程の必修単位を履修したのちでなければ英語学，英米文学，英語科教育法等の専門教育科目を履修することができないとすれば，学生によっては4年で大学を卒業することはほとんど不可能となしまうであろう．そればかりではなく，教官定数や予算等の現実的な制約もあることから，そのような治療を専らとする教育課程は，それを必要とする学生がたとえいても，実現することは不可能であり，実際にも，そういう治療のみを目的とする授業科目が設けられた経緯は英語科にはない．

それに代えて考えられた方法の一つが，専門教育科目の授業を行いながら，その中で，治療的教育をも同時に行うという方法であった．本論考が取りあげた文構造の重層性の解明への挑戦という課題は，相当に包括的で，かつ，あるていど高次の課題であるにもかかわらず，学生に挑戦をためらわせるほどの難題ではなく，そのうえ，事後に適度の成功感，達成感を味わわせることができそうな課題を求めるというわれわれの目的にそうものであろうと考えられる．そして，この際忘れてはならない重要なことは，それが大学入学以前のレベルで取りこぼしてきた訓練や知識の補充と回復を促すのに有効となるような課題でもあると考えられるということである．

参 考 文 献

Hallday, M. A. K. (1985). *An Introduction to Functional Grammar.* London: Edward Arnold.

Olson, D. R. (1977). 'From utterance to text: the bias of language in speech and writing,' *Harvard Educational Review* 47: 257 - 81.